「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 27 年 6 月 20 日
所属部局・職	霊長類研究所　生態保全分野・修士課程 1 年
氏　名	武　真祈子

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

愛知県犬山市　日本モンキーセンター（以下、JMC）

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

動物園・博物館実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 27 年　6 月　15 日　～　平成 27 年　6 月　17 日　（　3 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

野生動物研究センター教授・伊谷原一博士／日本モンキーセンターキュレーター・新宅勇太博士

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

日程

6/15（月）	6/16（火）	6/17（水）
13:00 JMC に集合、動物園長からのお話	9:00 JMC に集合	9:00 JMC に集合
14:00　園内の見学	10:00 飼育実習	9:10 獣医施術見学
17:00　松沢先生からのお話	12:00 休憩	11:00 標本庫見学
19:00　解散	13:00 ワオキツネザルの解剖見学	12:00 休憩
	15:00 エンリッチメントについての講義	13:00 骨格標本実習
	ワークショップ	15:30 液浸標本実習
	18:00 解散	17:00 解散

本実習には、霊長研の学生 10 名、野生動物研究センターの学生 2 名の計 12 名が参加した。

初日は、まず、伊谷原一動物園長から JMC の歴史や特徴についてお聞きした。日本で唯一の動物園博物館であること、また、野生下でのサルの姿を知るために飼育員を国内外のフィールドに派遣するという国内では例をみない取り組みが、JMC の大きな特徴であると感じた。その後、松沢哲郎教授から、本実習の意図についてお話をお聞きした。今後の JMC を変えていくのは私たち PWS 履修生自身である、というメッセージがあり、そのために、現在の JMC の実態を把握するというのが、今回の実習の目的であることを理解した。

二日目の午前中は、二人一組で飼育実習を行った。私は Morgane と一緒に南米館に配属され、飼育担当の根本さんのご指導のもとマーモセットの世話を体験した。まず、保育室と呼ばれる部屋で掃除と餌やりを行った。この部屋では、群れに入れない個体が小さなケージで個別に飼育されていた。次に、複数個体が群れごとに飼育されている大型ケージでの餌やり、床材の取り替えを行った。ここでは、根本さんご自身が生息地研修で実際に見てきたことを元に様々な飼育の工夫がなされていた。マーモセットはつる植物の茂みにいることが多いことから、近くの山からとってきた木のつるを配置したり、昆虫を探す行動を引き出すため、床にわらをしいてコオロギを放したり、といったことである。マーモセットが真剣にコオロギを探し両手で飛びついて捕獲する様は見ていても楽しく、エンリッチメントと同時に展示としても効果的であると感じた。一方で、先に述べた個別ケージでは、大型ケージのような工夫が難しいというお話もお聞きした。その

ため、午後のワークショップでは、個別ケージでのエンリッチメントを提案した。透明な箱にコオロギをいれ、上面にマーモセットの手が入る大きさの穴を開けて、コオロギをとって食べられるようにするというものだ。ディスカッションでは、「穴の大きさはどうするのか」「箱の高さはどのくらいか」などの議論ができ、より具体的な提案になったと思う。エンリッチメントと展示としての面白さは必ずしも両立しないので、その兼ね合いが難しいと感じた。

三日目は、骨格標本、液浸標本という二種類の標本に関する実習を行った。これら動物園博物館であるJMCの「博物館」としての活動である。骨格標本実習では、飼育実習のときのペアで、すべての骨の中から頭、四肢、脊椎、それ以外、といったように取り出して分類し、袋詰めする作業を行った。このような大まかな分類でもなかなか難しく、歯だと思っていた骨が実は指の骨だったりした。すべての骨を正しく識別して全身骨格を組み立てるためには、多くの時間と経験が必要であろう。液浸標本実習では、瓶に入っているホルマリン漬けの標本を、ビニールパックに移し替える作業を行った。これは標本庫のスペースを節約するためである。よく、整理整頓を勧める本に「1年間しまっておいて使わないものは捨てなさい」といったことが書いてあるが、それができないのが博物館であり、研究者の世界である。常に標本庫のスペースの問題を考えなければいけないのが宿命であることを実感した。ホルマリンの刺激臭の中で臓器を移し替えるのはきつい仕事だった。

全体を通して感じたのは、学芸員や飼育員の方の熱意である。自分で山に行ってつるを集めてくるなど、限られた予算と今ある施設の中で、できる限りの良い展示をしようという気概が感じられた。また、私が南米のサルを研究する予定であることを話すと、どの方も異口同音に「ぜひ、野生のサルを見てわかったことを持ち帰って教えて下さい！」とおっしゃっていた。自分の研究成果を持ち帰る場所、展示として形にしてもらえる場所があるというのは、大きなモチベーションになる。また、「シロガオサキはとても汚い食べ方をする（果物の一部しか食べず、残りをボロボロこぼす）」など、フィールドでの観察において重要そうな情報も飼育員の方から得ることができた。今後もアドバイスをいただきつつ、実際の生息地での生態を少しずつレポートしていければと思う。

手を怪我したバーバリーマカクの治療

病死したワオキツネザルの解剖

「動物園博物館」の役割についての講義

園内の見学

６．その他（特記事項など）

本実習は、PWS リーディング大学院の助成を受けて行われました。プログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。